

熱化学の力で世界のハイテク産業にアプローチ

～日本企業の細やかさを活かして、熱処理設備をオーダーメイド～



高砂工業 株式会社

代表取締役社長

鈴木 達也氏

住 所：土岐市駄知町2321-2

T E L：0572-59-1234

F A X：0572-59-2033

U R L：<http://www.takasago-inc.co.jp/>

事業内容：各種熱処理設備、熱処理ラインの一貫生産熱処理炉、真空炉や搬送ラインからなる設備を、試験、設計、製造、据付、メンテナンスまで一貫して手掛けます！豊富な試験設備を用いてお客様をサポート！

従業員数：266人（平成29年2月現在）

■ 窯業が盛んな土地で工業炉の開発製造をスタート

聞き手：初めて伺いましたが、広大な敷地で、きれいな工場ですね。創業はおじいさまだそうですね。

鈴木社長：当社の創業は祖父が1931年（昭和6年）に「高砂工業所」として駄知の町中で事業を興したのが始まりです。祖父は瑞浪市大湫の出身で、名古屋の電気工業メーカーで仕事をしていました。1953年に株式会社となる際、縁起のいい高砂の名前をつけ高砂工業となり、今日まで至っています。

聞き手：もともと焼き物を作られていて工業炉の製造へ、というわけではないのですね。

鈴木社長：以前の窯や炉というと、職人がレンガを積み上げて作るようなものばかりでした。周囲に設計者や技術者がいたこと、そして大量生産へと向かう世の中の需要にマッチしたこともあり、工業炉を手掛けることになったようです。創業当時から今も製造しているのが、陶器やタイル・瓦などのセラミックスを焼成するトンネルキルンなどです。

ちなみに駄知町を選んだのは、戦時中地元で航空部品を製造する会社があったことも理由の一つだと聞いています。技術者の方を自社に受け入れ、会社の基礎を固めたのです。

■ 窯業分野からハイテク分野へそして日本から海外30カ国へ

聞き手：キルン=窯、炉、なのですね。どのような業界で使わ

れているのでしょうか。

鈴木社長：もとはタイルや瓦といった窯業向けが中心でしたが、現在は様々な業界の粉体材料の熱処理に使用されています。LEDに使用されるハイアルミナ材、ハイブリッド車や携帯電話に使用される二次電池材料、薄型テレビ用のPDPパネルなど。そのようなニューセラミックスと呼ばれる分野に使用されることが、15年程前から増えてきました。リサイクル業界に利用されている例もあります。熱を使う工程が関わる業界として、食品や化粧品の原料といった分野にも関わっています。

聞き手：地元の窯業向けというだけでなく、様々な業界へと販路を広げられたのですね。

鈴木社長：関東、九州、北海道といったいろいろな地域に納入してきました。日本政策投資銀行からの勧めもあり、東南アジアへも輸出するようになりました。次第に台湾、中国など各国に合弁会社ができいき、現在では30カ国への輸出実績があります。

当初の海外営業は本当に大変だったことと思います。設計こそ日本でしますが、現地での設置、調整・試運転、そして納入先の皆さんが使えるまでトレーニングすることも当社の仕事です。

■ “小さくても丈夫”を叶える真空炉の開発

聞き手：窯業以外に目を向けられたのが15年前、社長に就任される少し前でしょうか。

